

## のこりものには福がある

3年1組17番 中谷いと  
3年3組14番 佐藤りん  
3年4組15番 佐藤音色  
3年5組16番 黒川愛莉

Keyword:「フードロス」「食品ロス」「飢餓」「売れ残り」「購買」

## 1. はじめに

私たちは世界規模の課題である、食品ロスの問題に目を向け、約2年もの間探究活動を進めてきた。食品ロスという課題は、同時に貧困や飢餓などの問題を引き起こす原因にもなるのではないかと、私たちは考えたのだ。なぜなら、廃棄されている食品の中にはまだ食べることができるのも多くあるからだ。その食品が飢餓や貧困で苦しむ発展途上国の人々に届けば、栄養不足で蔓延する悪状況が改善するのではないか。

この問題解決への企業の取り組みや、学校の購買の売れ残りを見た際に、自分達にも身近なところから解決に向けて何か行動することはできないかと考えた。大きな課題でも小さなことから始め、その活動をより幅広い範囲へと発信していくことにした。

## 2. 序論

現在、世界は科学技術などが発達し、必要な分の穀物の生産は十分に出来ている。しかし、世界の10人に1人、約8億人の人が飢餓で苦しんでいる(2023年、UNICEF調べ)。その背景として、各国の経済力の差が挙げられる。裕福な国が食料を占領して、貧しい国の食糧が不足している、すなわち、世界的な食料の分配が上手く出来ていないのが現状だ。世界人口の約1割を超える飢餓人口の一方で、ほぼ同数の過剰な飽食と肥満疾患の増加が深刻化している。(NHK引用) 日本での令和3年度の食品ロス量は523万トン。食品ロス量の内訳を見ると、全体の523万トン中、事業系食品ロス量は279万トン、家庭系食品ロス量は244万トンだった。これは毎日国民全員がお茶碗一杯分の食料を捨てている事に等しい。(農林水産省引用)

フードロスは社会全体で環境負荷や資源の無駄使いなどの問題を招く。フードロスを削減する事により、廃棄される食糧の運搬や焼却のために使う化石燃料を減らし、地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出量を軽減する事が出来る。又、焼却炉の維持管理費を減らし、無駄な支出を削減するという経済効果もある。他にも、輸入食品のフードロスを減らす事で、その分の食糧を貧しい国に分配して飢餓で苦しむ子供達を救う事も出来るので、世界の食糧不均衡の解消にも役立つ。

このように、フードロス削減が他の環境問題や社会問題を解決する糸口になり得る。そこで、私達は高校生としてフードロスに少しでも貢献するために何が出来るのだろうか。そこで、先生方や生徒の協力も得て、まずは身近な購買の売れ残りをなくす事を目標に取り組んだ。



### 3. 本論

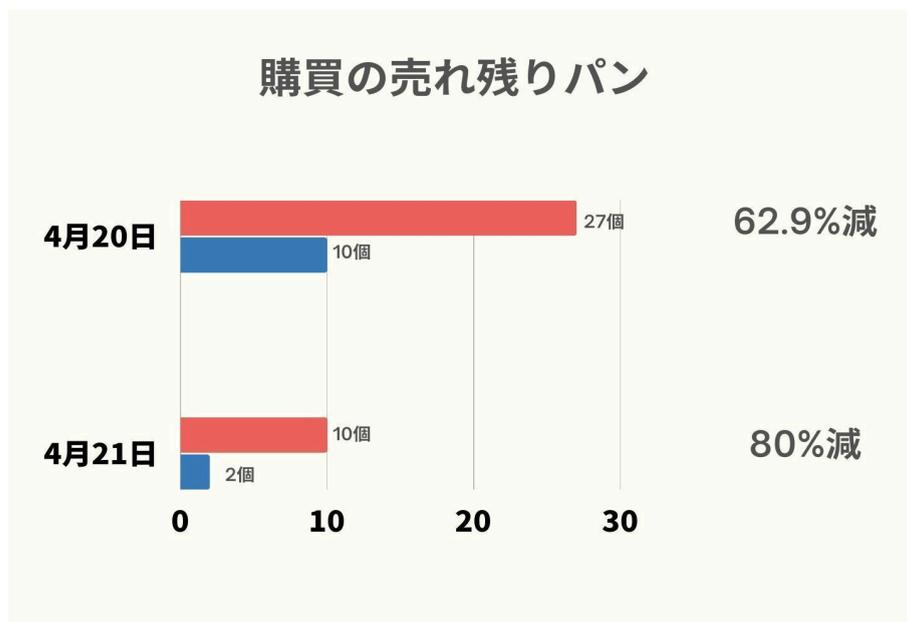
#### ・活動結果

##### (1) 校内放送での売れ残りの呼びかけ

購買のパンやお弁当などの売れ残り削減の方法として、日本語と英語で校内放送を利用した売れ残り商品の宣伝を行った。国際高校には海外からの留学生やネイティブの先生方も多く、日本語では購買の売れ残り状況を把握することが難しい。そのため、そういった方々にも伝わるように英語でも売れ残り状況を放送した。毎日の売れ残り数が明らかになり、商品がロスとなるタイミングでの直前、昼休みが設定時間だ。

2023年4月20日木曜日と翌日21日金曜日の2日間にわたる放送活動の結果、4月20日木曜日は放送前27個のパンの売れ残りが放送後10個に減少した。62.9%の削減に成功した。そして2日目の21日金曜日は放送前10個から放送後2個に減少した。1日目以上のおよそ80%の削減に成功した。

下の図の購買のパンの売れ残り状況を表したものだ。赤は放送前、青は放送後を示している。グラフから読み取れるように、両日とも半数以上の売れ残りを減らすことができ、国際高校の購買におけるフードロス削減への貢献に成功した。



## (2) 購買のパンを提供してくださっているパン屋さんへのインタビュー

2023年5月11日木曜日に、購買のパンを提供してくださっている、「ロンドン」さんに直接伺い、インタビューを行った。

国際高校の購買から「ロンドン」さんに返却される一日のパンの量を聞いた結果、売れ残りが無いように数を調整しているため、返却されるパンはほとんどないとのことだった。また、週末は売れやすく月曜日は売れにくいそうだ。

次に、他の高校や職場にも提供しているか聞いた結果、提供しており、売れ残り状況も国際高校と同じくらいだそうだ。

最後に「ロンドン」さんで行っているフードロスへの取り組みについて聞くと、お店の中で売れ残ってしまったパンは従業員が持ち帰っているそうだ。

### ・考察

私たちは、購買のパンの納入店である「ロンドン」さんからのロスを減らすことは、現在の日本の523万トンのロスのうち、およそ半分を占める事業系ロス削減に貢献することができると考えた。そしてその取り組みは、全体のロスを削減することにもつながる。そのために私たちは、身近な学校の購買からの売れ残りを減らす取り組みを行った。高校生として取り組める簡単な取り組みではあったが、校内放送といった国際生だけでなく留学生やネイティブの先生方を含んだ、学校全体が対象となる大きな規模の取り組みを行ったことで、結果が出たのではないだろうか。

また、購買の売れ残りの状況を知らない生徒や先生方に向けて現在の状況を知らせ、簡単に取り組むことができる協力を呼びかけたことで、購買に足を運ぶ人が増えたと考えられる。結果、パンの売れ行きが良くなり売れ残りが減ったのではないか。

## 4. 結論

本やインターネットだけでなく実際に自分達で積極的に行動し、より正確で現実的なデータを得る事に努めた。又、その収集した情報だけでなく、消費者である私達に出来る事も一緒に発信する事で、より多くの人に実践してもらいやすくなり、1人1人の行動が大きなフードロス削減に繋がる事を改めて実感した。探究活動の中で、世間のフードロスに対する意識の低さや知識不足を目の当たりにし、フードロスは誰もが当事者で小さな意識と行動で改善する事が出来るのにも関わらず、沢山の人が蔑ろにして過ごしている。この現状を少しでも改善するには、社会全体でフードロスへの取り組みが必要とされる。英語圏では、“buy one get one free”という販売方法で販売を行っている店が多く存在する。buy one get one freeとは、同じ商品を二つ買うと一つおまけで貰えるというものだ。購入者は、おまけのひとつをフードバンクに寄付して帰るなど、日常的にフードロスを削減することが出来る。又、アメリカでは“シェアテーブル”という、給食のフードロスを削減する政策が行われている。シェアテーブルとは、予め食べない食事をシェアテーブルと呼ばれるテーブルに戻し、他の生徒がそのテーブルから好きに食事を取れる仕組みだ。未来を担う子ども達に、小さい時からフードロスに対する意識を定着させることで、持続可能な社会を形成する大きな一歩に繋がる。日本も、このように日々の生活の中からフードロスを削減出来る仕組みをとり、国が一丸となって取り組むことが重要だと考える。

## 5. おわりに

私たちは、約2年間の探究活動を通して、たくさんの人と出会い、新たな学びの扉を開いてきた。購買の方、取材をさせていただいた購買のパンの納入店である「ロンドン」さん、そしてアンケート調査に協力してくれた国際高校の生徒など沢山の方の意見を参考にし、身近なところからさらに幅広い範囲へと活動の幅を広げることができた。

そのようにして食品ロスという問題についての知識を深めるごとに、その知識を周囲の人に共有してきた。そしてその中で、今まで以上に食べ残しをすることに対して抵抗感を持つようになった。だが、食べ残しをしない、必要なものを必要な時に、必要な量だけ購入するなどの意識は小さい頃から習慣として備わっていく意識なのではないか。そしてそのためには、結論でも述べたよ

うに、幼稚園や保育園、小学校などでの教育が必要になる。そこで私たちが行う次の活動計画として、それらの教育施設で講習会を行い、食品ロスのない未来を作り上げていく人材の育成に携わりたいと考える。

#### 6. 参考文献・出典

・農林水産省(2020). 特集「食品ロスって何が問題なの？」.

[https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spe1\\_01.html](https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2010/spe1_01.html) (参照2023-10-20)

・NHK for school(2022)「リフォーマーズの杖 笑いで食料を集めろ！プロジェクトテーマ 飢餓をゼロに」.

[https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?das\\_id=D0005270094\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/school/watch/bangumi/?das_id=D0005270094_00000)